



第5巻第4号  
通巻第52号

# SARS にキムチ？

からす新聞社健康医療局の独自調査報告によると、ニンニク、トウガラシ、カラシ、ワサビなどの殺菌作用の強い食品群を恒常的に摂取することにより、SARS への感染を防ぐことができると判明した。

なおいまのところWHOよりこの件に関する問い合わせはない。

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社  
からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : [colors@go-karasu.com](mailto:colors@go-karasu.com)

今年はじめのナミアゲハを見た。それはうつすらと青く、遠目では、瞬間、アオスジアゲハと見紛うほど。小ぶりで、羽化したばかりであろう、その羽の色の鮮やかさ。雑草が覆う緑の合間の土の上にとまって、羽を休める。桜が咲いたり散ったり、それを眺めながら盃を傾けたり、初々しい一年生がランドセルに押し潰されそうになりながらよると、それでいて、元氣よく歩いていく姿を眺めたり、あちらこちらで花が開き、そこに白や黄色の蝶が戯れたり。春である。

春という季節は、何とはなしに、ほんのりとした幸せを想起させる季節である。それは、生まれてから今日までの間に社会から刷り込まれたイメージにすぎないのかもしれないけれど、そんなことでささやかな幸せに浸れるのであれば、それはそれで素敵な幻想だ。しかし、幻想がおかしな方向に進んで悲劇を作り出すことがないわけではない。今春、自らを世界の警察だと妄信する愚者が、圧倒的な暴力を用いて、数多の理不尽な死を生み出した。私たちが桜の香色に酔い、酒に酔い、少々浮かれた気分になる春。だが、死者の家族や友人たちにとっては、それは失われた命を思う季節になってしまった。

その朝、今年はじめのナミアゲハとの遭遇は私の気分を少なからず昂揚させた。少しづつを歩いていった家人に、羽の色やその所作について説明し、蝶が移動すればあとを追って進行方向とは逆に進んだり。

一頻り眺めて気が済んだ私は、自室に上がり、コンピュータの電源を入れ、窓を開け、空気を入れ換える。煙草に火をつけ、夜のうちに溜まっていたメールを眺める。日常の始まりである。普段なら、緊急性の高いものから順に返事を書き出すところだが、どうも今日はそんな気分にはならない。先程のアゲハチョウの鮮やかな羽色が、どうにも頭から離れようとしなない。脳内で彼の姿を反芻すること暫し。限りがないので、返信の文案を考え始めたところで、何やらもやもやした疑問が胸の内に漂っていることに気づいた。なぜ、私は、日常の始まりであると感じたのだらうかと。

例えば、夜空から爆弾が降ってくれば、それはまちがいない、私にとっては非日常である。けれども、今朝の私はその年初めての出来事に合ったとはいえず、それは四十年近くも繰り返されてきたことであるし、これから秋にかけて、私は数知れぬアゲハチョウを見かけるはずである。にもかかわらず、私はそこに些か日常

(最終面に続く)

## 今日の紙面から

- 二面 オーラ面  
松本と話そう(トンボンパン)
- 三画 芸術面  
レイズ・ギャラリ
- 四画 からすライブラリー  
CD 『アロハ・ポリドール』  
本 『コンプリート・イラストレイテッド・ワクス・オブ・ルイス・キャロル』  
映画 『スター・トレック・ネメシス』
- 五画 八面(国際面)  
ロンドンレポート

からす新聞は××××が母体となって、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。  
誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

松本と話そう  
ピンポンパン

最近、近所で、そして電車内で、禿げ親爺を滅多に見ない。

そこでこう思った。カツラって一体何の象徴なんだ？

自分は前髪が薄い。本当は、一度くらいロン毛にしたいのだがもうできない。筑紫哲也が信じられない。

が、決してカツラという発想にはならない。というよりそうなる人の心の回路が分からない。もちろん、もし当人が芸能人ならば、当人のブランドの一部である顔を維持するために考えても不思議ではないが。たとえば、ポール・マッカートニーなんかのように。(しかし彼のほうでできるな。さすがあの歳になっても今年度断トツ英国内長者版付第一位。それに比べ、バズ・コックスの奴のはすぐ分かる。恐るべき金の力の差)。だって、もとマッシュルームカットで一世風靡したピートルズの中核メンバーなんだから。しかし、する人の大方は一般人であるのだ。

こないだテレビ見てたら本当かどうか知らないが、フランス人の男はまず、ゲイハーになつてもしない、なんてどっかのフランス人女が言っていた。説得力あることに、国内で最もセクシーな男に数年前に選ばれたジダンや、ジャン・レノを例に挙げていた。そして同じ毛つながらりでは女が脇毛を剃らないということもよく言われる。確かに、ゲインズブルの奥さんのジェーン・バーキン(元イギリス人とはいえ)そのままだったな。

カツラについてのメンタリティーを考える時にフランス人のメンタリティーと日本人との差

を考えれば、なぜカツラをしたがる人がいるのか、へのヒントになりそう。

数年前のトルシエ。我が国で嫌われながらも最後は受け入れられて結果を出した。サッカー日本代表W杯ベスト十六位。

近年の日産社長のカルロス・ゴーン。リストラ、工場閉鎖の風でおそれられながらもなんと三ヶ年計画だったのが一年で経営黒字。

そしてこの間のシラク。あのアメリカを敵に廻しながらもイラク侵攻に首尾一貫、反対する。そして、世界の多数はその支持に廻る。

そう、フランス人は攻撃的であり、つまり禿の原因とされる男性ホルモンの分泌が盛んであることが考えられるが(実際、ゴーンとシラクは禿げている)。それを真正面に通す勇氣も持っている。つまり、結果、禿げても堂々とそれを通すのである。

に対し、日本人は、こないだのイラク侵攻の際の国民や小泉首相(髪ふさふさ)の反応からも分かるようにどこまでも煮えきれず女々しい。なるがまま。挿入してもらって自分は動かなくても感じるまま。そう、受動的であり、自分の信念で動く勇氣を持つ必要もない。そうすると男性ホルモンの分泌は少ないと考えられ、相対的に禿げの割合も少ないと予測される。が、そういう中で、禿げてしまった一部の日本人は、本来、男性ホルモン分泌の多さからすれば日本人の中では攻撃的であるはずだから、飾る必要がない、つまり禿げてモカツラをするのにはどうして多くは被つてしまつたのだろうか。やはり、多数派が作り上げた、女々しい恥じらいの文化の中では男性的本能も社会性に負けてしまつたのだろうか。

そう考えれば、カツラは日本文化の立派な一部なんだろう。

痴漢・通り魔撃退いたします

ストーリー  
バスター

produced by

P.D.Agency

tora@pda.co.jp

1843 N. Cherokee AVE: APT. #216

Los Angeles: CA 90028, USA

voice : +1-310-493-1001

facsimile : +1-323-466-5645

## Rei's Gallery



## チビゴト

5月のグループ展に向けて作品の仕上げに追われています。  
私達の展示のテーマは八百屋さん。800808(はっぴやくやおや)つていうグループ名。アメリカ人の子からカトリック教会のグッツデザイナーまで不思議な職業の人たちと共に作品を発表します。  
私は八百屋ということ、子供のころに誰もがやったごっこ遊びをコンセプトにして作品を発表します。その中の一つの作品「チビゴト」です。  
子供はママゴトをしていつかママになれるけど、大人はチビゴトしても子供にはなれない。だからチビゴト人形は悲しそうな顔でちよっとくたびれています。  
遊びに来て下さい。

5/4.5 南青山スパイラル

『第4回 SICF』 <http://www.spiral.co.jp/sicf/index.html>

一般 1200 円 学生 800 円

## Star Trek NEMESIS

(邦題: ネメシス STX)

監督: スチュアート・ベアード

制作: リック・バーマン

脚本: ジョン・ローガン

出演: パトリック・スチュワート、ブレント・スピナー他



邦題ではS・T・Xなどとしてしまったが、スタートレック劇場版の10作目、テレビシリーズのTNG(元)になっているテレビシリーズ)が終了してから幾久しいが、人気のある舞台設定をそのまま劇場用映画に持ってきている。また、脈々と続くタイプなファン向けのサービシヨットももりばめてはあるが、話の本筋自体とは一切関係ないものばかり。問題の本筋だが「ネメシス」とは聞きなれない言葉。本来キリシヤ神話に出てくる「復讐の女神」。しかし、本編では「生霊(ドッペルゲンガー)」という意味で使われている。早い話、クローンが敵役なのだ。正直な感想として、テレビシリーズにあった毎回見るとわくわくする期待や興奮、細部にわたる緻密性とはほど遠い。普通のSF映画だった。これは、パラマウント社の方針でもあるのだが、従来のタイプなファンだけで無く、初めて見る観客にも解りやすい内容を求めた結果だろう。米国経済も決して順調とは言えない昨今、映画会社も収益重視からは外し難いようで、狭义的を狙って大勝負は避け、手堅い路線でまとめた感がある。しかし、トレッキーとしては押さえなければならぬのも事実だ。

話題としては、人気キャラのデータ少佐が自爆してしまうのだが、...

(小張寅僧)



## the Complete Illustrated Works of Lewis Carroll

Lewis Carroll

Chancellor Press, 1982

ISBN 0-907486-21-5



Books

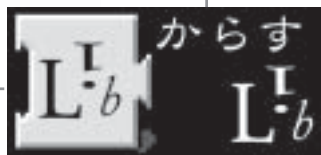
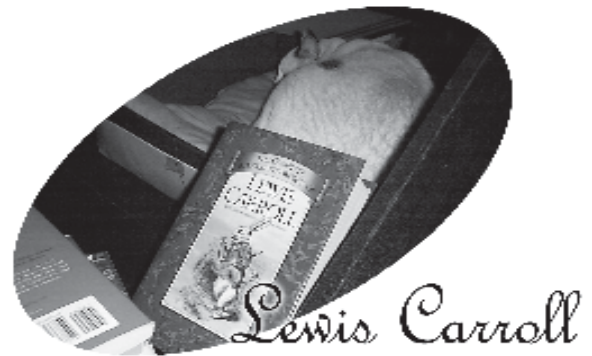
待ち合わせに早く着いてしまった場合、どうやって時間を潰すか。本屋に寄って気紛れに一冊選び、その本を持って喫茶店に向かう。これが、嘗ての私の定番の行動であった。無論、常時、読みかけの本を携帯してはいるのだが、何となく本屋に飛び込んで、何となく選んだ本を買う。そんな習慣。良い本に巡り合えることもあれば、酷い本をつかんでしまうことだってある。そんな場合には、読まずに、喫茶店に本を置いてきてしまったこともある。

こんなパターンで購入した本の中で、最高のものがこの一冊。もともとルイス・キャロル好きの私であったが、紀伊國屋の平台でこの本をみつけたときには、中を覗くこともなく、レジに向かった。

些か厚手の本なので、家に辿り着くまで、終日、厄介な荷物になってしまったけれど、その重さと嵩に負けないだけの幸せな気分も与えてくれた。

挿絵は全て初版当時のものを採用している。ぱらぱらと眺めるだけで、笑みがこぼれる。そんな本はなかなかない。

(全太)



## Aloha Polydor

フィッシュマンズ (Fishmans)

ポリドール 1999年

ASIN: B000056KRT



CDs

彼らのライブにいったい何度足を運んだらうか。ライブがある度に行っていたせいか、もうそろそろいいでしょ」と半分面倒臭くなりながらチケットを確保する、そんな状況だった。しかし、そんなモチベーションの低さでもライブ会場に行けばさつきまでのことが嘘のように、ひたすら音に身を委ねてしまうのだ。単純な歌と気持ち良い音。それで最後には「やっぱり最高だ、間違いない」などと気分良くなって帰る。それが、フィッシュマンズ。

ボーカルの佐藤伸治が亡くなって4年が経ち、ベースの柏原譲はポラリスというバンドを始め、ドラムの茂木欣一はつい最近東京スカパライズスオーケストラでドラムを叩きながらボーカルまで務めていた。彼らがとくに別の人生を送っていることは百も承知なのだが、私も含め私のまわりでは誰も未だに忘れようとはしない。夜な夜なお酒と共に廻るレコードも、晴れた日曜のBGMも、いつだって当たり前のように、フィッシュマンズなのだ。

過去でも未来でもなく今ほかならぬ音が、刹那刹那を歌う音が、まだまだ鳴り続けるに違いない。(と)

ろンドン つうしん  
London Report

## ベーコン

久しぶりに、今週末は家でノンビリする予定でDVDを買いに街へ出てみた。DVDを買うという行為自体、ずいぶんご無沙汰だったので、ついつい欲しい物が目に留まる。最初は週末に見る分、一本だけ映画を買って帰るつもりだったものの、ついつい四、五本買ってしまった。考えてみたら、映画を映画館に見に行く一回、約10ポンド前後。安売りされているDVDを一本買うのも約10ポンドと、どちらも同じような値段。大画面と大音量の中で集中してみられる映画館が、いつでも好きな時に、何回でも自分のスペースでくつろいで見られるDVDか、どちらが特なのか迷ってしまう。映画館の値段が高いのか、DVDが安いのか、微妙なところである。何にせよ、自分の部屋で煙草を吸いながら、酒でも飲みながら、映画を見られるのは有り難い利点だし、映画館に映画を見に行く為に出掛ける、という行為は日常にささやかな変化をもたらしてくれるので、自分にとってはどちらも必要なものなのである。そんな事を考えながら、買い物を終えて家に帰るバスの中で、ふと目をやるとポエムを見つけた。

こちらのバスや地下鉄にはたまにポエムが張り出されていて、日本で言う電車の吊り広告のように、広告を載せるべき場所の一つがロンドントランスポートの企画として、ポエムになっているのだ。それぞれのポエムは一般からの公募ではなく、詩人として名前の知られている人々の作品。まず、その企画自体が僕は好きで、地味ながらも何だか心を和ませられる。息苦しい地下鉄の中で、飲んだ帰りのナイトバスで、ふとした日常にポンッと視界に入るそれらは、その詩自体が好き嫌いに関わらず、何だかちょっと忘れていたものを思いださせてくれるような気がするのだ。

そんな訳で、見つけた一つ。随分前にバスの中で見て、気に入っていた詩を久しぶりに見つけた。何故か当時、全部の単語、詩の意味を理解したわけじゃないのに凄く気に入って、忘れないうちに急いで家に帰ってインターネットで調べたのを覚えている。

「Like A Beacon」 Grace Nicols (b. 1950)

「信号灯のように」と名付けられたこの詩は、ロンドンに、もしくは都会に住んでいる時の、何となく何か足りないような気持ち、手応えが無いまま時間が過ぎていくような感じの中での、前向きな気持ち、明るく振るまいながら前に進もうとする力を思い出させてくれる。凄く単純で、短い詩なのに読むたびに味が出てくる



気がするのだ。少し、最後の段落から引用を。

swinging my bag  
like a beacon  
against the cold

簡単な自己流の解釈だと、ロンドンに住む女が無性に母の味が恋しくなり、美術館を出る。買い物をしながら、バッグを振り回すこのシーンで詩は終わっている。もっとも僕は最初、このBeacon(信号灯)をBacon(ベーコン)だと勘違いしていた分、インパクトは通常のそれよりも大きかったはず。「ベーコンのように」として、ベーコンって振り回すもんなの？と、思いつつ頭の中では「ベーコンを振り回す女」が元気いっぱい。何だかちょっとアナーキーで、それはそれで好きなんですけど、本当はBeaconでした。

何となく日常が少し重たくなる瞬間が、どうしても暮らしの中ではあり、そんな時に映画を見に出かけたり、買い物に行ったりして、はかる気分転換。散歩に出かけたときのような、外の新鮮な空気に癒されるときのような感じをこの詩から感じるのは僕だけだろうか。

(神山)

Like A Beacon

In London  
every now and then  
I get this craving  
for my mother's food  
I leave art galleries  
in search of plantains  
saltfish/sweet potatoes

I need this link  
I need this touch  
of home

swinging my bag  
like a beacon  
against the cold

Grace Nicols (b. 1950)



## ウォーターネットワーク

スペインの首都マドリッドの名の由来は、水のネットワークというイスラムの言葉である。でも、マドリッドには、アムステルダムのように運河が張りめぐらされているわけでもなく、ベニスのように無数の橋が人びとの生活に密着しているわけでもない。反対に、マドリッドには乾燥した赤茶けた大地のイメージが付きまとう。カステリヤーノのなだらかに広がる荒れた丘陵地帯。ルイス・ブニュエルの映画の背景のような原風景を思い浮かべる。彫刻家で画家のアルベルト・サンチェスの絵画もまた、荒れた丘陵地に暮らす人びとの日常を、その風景の中に重ねていた。彼らや、詩人のガルシア・ロルカが愛したのが、マドリッドの南の郊外のヴァイエッカ (Vallecas) という土地だった。その街は、マドリッドの傍にありながらマドリッドとは違う別の世界とみなされていた。一本の小川が流れ、その小川に向かって緩やかな谷となる丘陵地がひろがる。ヴァイエッカ (Vallecas) という名前もイスラムの青年の名前をもった谷、valle ということである。

かつて、というほど遠い昔のことではないのかもしれない、羊やロバが荷物を運ぶ風景が日常であったと思われる。土地の区画線に沿って、ここはヤギの通る道、などという説明を受けるくらいだから。ヴァイエッカ (Vallecas) では、優秀な石灰が産出されていたらしい。背中に沢山の石灰を積んだロバをひいて、人びとはマドリッドとの間を往復した。石灰は、マドリッドの数々のイスラム建築の文様をかたちづかったのである。美しい幾何学模様やコーランの一節をその壁に刻み込むための貴重な材料だったのだ。

遙か上空のランドサットから撮った写真を、ダウンロードしてみる。色が反転しているので、赤く示されるのが緑が多く豊かな土地である。(白黒の本紙では色の黒いところがそれに当たるが、道路の部分の色も黒くなっているのちょっと注意が必要かもしれない。)市の中央にある大きな赤い(黒い)広がり、プラド美術館の後ろに広がるレティーロという100ヘクタールを超える公園である。17世紀につくられ、かつては貴族しか立ち入ることができなかったが、今は市民の憩いの場所である。南の郊外は、なんとなく水気も緑もないような荒野であることがわかるが、反して、市の北方には豊かな緑が広がっている。高級住宅地もこのあたりだと聞く。無数の小さな湖が、大きな森に囲まれて点在する。英国の湖水地方のような、というイメージの緑と水の広がりである。北西に広がるのは、カンポという人工的に作られた森であるが、今は鬱蒼として自然の様相を呈している。Campoとは、スペイン語で、country とか countryside という意味がある一方、スポーツのピッチという意味もある。フットボールのスタジアムもカンポであるし、ゴルフのコースもそうである。

マドリッドは、ひとつの大きな川のほとりに発展した。写真を左上から右下に少し蛇行しながら流れているのがその河川だ。さらに無数のGaviaと呼ばれる小川が存在し、それらが本流に流れ込むことで、都



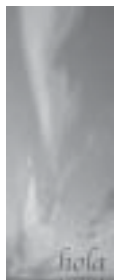
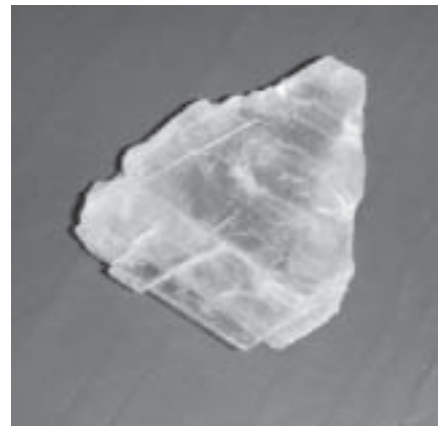
市の基盤がつくられたこともまた確からしい。今でこそ小さな河川のいくつものは枯渇し、あるいは暗渠になり、ウォーターネットワークという言葉の面影すら感じさせないが、都市の成り立ちは、どうもそうであったらしい。

最近、ひとつの大きなコンペティションがあった。タイトルはウォータースパイラル。マドリッドと水の関係を考えるというものである。

スペインは、今、パルセロナでのオリンピックやセビリアの万国博などを経験し、ユーロによるヨーロッパの経済統合の勢いに乗って賑わっている。サッカーの世界では、レアル・マドリッドが世界中からスターを集め、スペインリーグ自体がヨーロッパ最高のパフォーマンスを見せているが、同じようなことが言えるのだ。このところスペインではいろいろな建物や開発の計画がめじろ押しである。ジダンやロナウドといったサッカー選手よろしく、世界から、涼々たる建築家やデザイナーが集まり、百花繚乱これでもかというくらいの様相である。ちなみに、巨大な富をもとに集められたサッカー選手には到底及ばないが、スペインにおける建築家の社会的な立場は相当高く、それだけに報酬も保証されている。ただし、いつ建物ができるのか、いつ報酬が支払われるのかは、果たして明確とは言いがたい。このあたりは、フットボールの世界とは異なる。

(つづく)

(篠崎健一)



# 三ちゃん の自由

汚くもワンドフルな自由

先の戦争一の悪役といえば、ドン・ラムズフェルド米国防長官を措いて右に出るものはいないだろう。そんなドン長官のこんな発言が印象に残る。

And it's untidy. And freedom's untidy. And free people are free to make mistakes and commit crimes and do bad things. They're also free to live their lives and do wonderful things.

April 12, 2003

「汚いんですよ。そうでしょう、自由なんて汚いものでしょう。自由な人間ってのは、間違いをやらかす自由も、罪も犯す自由も、悪いことをする自由も持ってるんです。でもね、彼らは自分自身の人生を生きる自由や、素晴らしいことをする自由だって持ってるんだ」

「彼ら」とは、掠奪に走ったイラク市民のことだが、「それでもやっぱり自由はいいものでしょ、違いますか」、そうドン長官は言う。「だからあなたたちにも戦争を仕掛ける自由があるのか？」と問われれば、長官は即座に「イエス」と答えるにちがいない、「自由のためなら仕方ないでしょう」。そういえば、作戦名は Operation Iraqi Freedom 「イラクの自由作戦」だった。

free とは？

ところで、free とはそもそもどういう意味なのだろうか。Oxford English Dictionary は、その第一義としてこう定義する。

Not in bondage to another.

「他に束縛されていない」

語源を遠くたどれば、インド＝ヨーロッパ語に共通の prijos 「親愛なる」。やはりこの語を祖先に持つ英語には friend もある。

free は、基本的に良い意味の言葉だ。ドン長官は「freedom は汚い」と言ったが、やはりその前提には、「確かにそういう面もあるけれど、でも、やはりいわれ無き束縛には堪え難い」との考えがある。これが free についての共通認識だろう。

もちろん、個々の「自由」についての議論はある。たとえば、いま、アメリカでは銃を持つ自由と、人工中絶する自由は噛み合わない。前クリントン政権は前者の一部規制を試みる一方、後者を擁護する立場に立ったが、現ブッシュ大統領はまったく逆。それぞれの陣営がそれぞれ相手の「自由」の負の側面を攻撃する。一方が「人殺しの道具を持つ自由など」と言えば、一方は「胎内にあっても生命であり、それを殺す自由など」と言い、双方が「汚い自由だ！」と罵りあう。

このせめぎ合いは当然続くだろうが、いずれにせよ、現状どちらも規制はかなり緩い。基本的に、国民一人ひとりに判断の自由を委ねる空気が、他のどの国よりも強いのがアメリカである。だから、自由の汚い面も彼らは良く知っているということなのか。それが、ドン長官の発言にも通底するのか。

ちなみに free には「無実の」という意味もある。自らの主張する自由の背後にある「汚さ」を自覚する人は、

My hands are guilty, but my heart is free.

「我が手は罪深いが、心は無実だ」  
こんなふうにするのかもしれない。

free に接近する自由

ところで、日本語の「自由」は free と同じだろうか。だいたい同じだろう。それもそのはず、そもそも「自由」は free の訳語として当てられたものだ。でも、アメリカ人ほどの自由への渴望が、日本人にあるだろうか。

日本では、良くも悪くもアメリカに比べて管理の度合いが高い。そしてそれを国民はある程度受け入れてきた。国や会社に束縛されても、面倒を見てもらうことをよしとしてきた。みんな横並びの和の社会である。それが、近頃では風向きがずいぶん変わってきているようだ。アメリカのごとき「自由な」銃社会を望む人は、かなり限られた人たちだけだろうが、流れはどうやら規制緩和、実力主義の方向。これからはもっと自由にできますよ、やりましょう、ということみたいだが、自由のあるところ軌轢するのは、洋の東西を問わない。

きれいな水を欲しがると自由は汚い

彼は知らぬが、わが静岡県富士市本市場新田の一部の百姓たちは、自由をそもそも汚いものと考えている節がある。三ちゃん(仮名)は、自分の田んぼで有機農法をやろうと思立った。だけんど、自分のとこだけきれいにやっても、隣の田んぼから農薬まみれの水が流れてくるんじゃ仕方がない。だもんだから、隣の金造ちゃん(同)と、隣の隣の石田のせがれ(同)も誘ってみた。石田の水は金造へ流れ、金造の水は、三ちゃんへ流すしかない構造になっているのである。ところが、金造も石田も、「三ちゃんに有機やるのは自由だけんどさ」とは言うものの、やっぱり「今まんまでいいじゃにやあ？」

彼らはべつに三ちゃんが嫌いなわけではない。面倒が嫌い、変化が嫌い、自由なものの考え方が、嫌いなのである。毎日毎月毎年ただ同じ作業を繰り返す百姓たちは、束縛ばかりである。文句があっても、お天道さんに向かって自分の自由を主張してみたって始まらない。彼らの自由は、テレビとカラオケと部農会旅行に出掛ける自由。それ以外の自由は和を乱すものにほかならない。

金造と石田は家に帰って女房にこう報告する。「三ちゃんが勝手なこと言い出してな。我田引水ってなあ、このこったなっへっへっ。どうやら、彼らにとっての自由とは、自分勝手とほぼ同意みたいだ。

古き悪しき日本の自由

じつは、日本語における「自由」という言葉の歴史は古い。ただし、その意味は、いまよりもずっと限定的だ。

世を軽く思ひたる<sup>くせもの</sup>曲者にて、よろづ自由にして、おほかた人に従ふといふことなし<sup>しいう</sup>

これは、『徒然草』第六十段(14世紀)からの引用。ある僧を寸評しているのだが、この「自由」は「わがまま」「勝手」「気まま」。当時はその意味が主流だった。ただ例外的に禅僧たちは、何事にもとらわれない境地を「自由解脱」と称していた。

時代は下って幕末のころ。押し寄せる外国語の波の中に、free や liberty があつた。なかなかうまい訳語が見つけれない中で、

(最終面に続く)

(七面から続く)

当時の知識人たちの多くが、仕方なく「自由」を採用した。そのうちのひとり福沢諭吉は、こんな言い訳をしている。「中国では自主、任意、寛容などが当てられているが、いずれも一長一短。取り敢えず自分は『自由』にしたけれど、そこにはいま言った言葉などの意味も込められているので誤解のなきよう」

やがて「自主」「自在」「寛弘」などのライバルたちは姿を消し、「自由」が生き残った。自由という言葉の意味は一気に広がり、いまではすっかり free と同じように使われているように見える。それとともに、「我がまま勝手」は、自由の裏の意味として控えることになった。つまり、行き過ぎた自由は勝手と同じ、自由と勝手は裏表。車の中で練炭を焚く自由はあるが、他人に自分の死体を片づけさせるのはわがまま勝手、という具合。いかにもそれは欧米風の free = 自由だが、はて、本当に浸透しているのだろうか？ 少なくとも本市場新田ではそうではなさそうだが。

解放か平穏か

三ちゃんの「有機をやる自由」には、何も行き過ぎたところはない。どうやら本市場新田では、まだまだ兼好法師のころの「自由=我がまま勝手」が生きているようだが、三ちゃんもめげてはいない。孤高の戦いに迷いはない。国際社会の批判を押し切ったアメリカよりも、よっぽど自らの自由を押し通す大義名分が、三ちゃんにはある。それは、硬直したホリシタ百姓社会を解放することである。オペレーション・ホリシタ・フリーダムである。有機農法への追い風も吹いている。どうやら農協も味方につけたようだ。

対する金造・石田の連合軍にだって、伝統を守ってきたという自負がある。「硬直というならそう呼びゃあいい。でもな、みんな仲よくやって来たんだ。表だけでもな。俺たちにゃあ、それを守る自由があるら」。有機が悪いとは言わないが、和を乱してまですることか。それに、跡継ぎのいない彼らには、このまま静かに百姓生活を終えたいとの思いがある。

勝利の女神は三ちゃんに微笑みかけている形成だが、先を急ぎすぎないことが肝心である。無理に自分の自由を押し付けようとするれば、仮に思いを遂げたとしても、自宅も隣あう金造は黙っていないだろう。今度の建て替えのとき、土を高く盛って三ちゃん家を見下ろす家を、建てられてしまうにちがいない。それだけでなく三ちゃんは去年の建て替えで、50センチの差を付けているのだから。

\* ホリシタ(堀下)は、本市場新田の中の一部落。農業従事世帯数

(望月)

(一面から続く)

常から逸脱した何かを感じてしまった。日常とは何なのだろうか。あるいは、非日常とは。

カレーの材料を求めて、オートバイで五日市街道を走る。横断歩道の白線や意味のわからない鉄板、明らかな凸凹が存在する。それでも、それなりに平らかな道を快適に走行しているような気がしている。しかしながら、地面に鼻っ面を擦りつけるほど近づかなくとも、アスファルトには結構な凹凸が存在していることはわかりきっている。不快に感ぜずにいられるのは、オートバイのショック・アブソーバーのおかげでもあるけれど、それ以上に、私の感覚がその揺れを許容しているからに違いない。とらいち商店で玉葱と獅子唐を手にして、そんなことを考える。

私たちの日常はスライムのように不定形で、それではないが、一塊であるような、そんなものではないが。スライムの真ん中に私がいて、私が歩くたびに、私の日常もゆらゆらと移動する、というような。私の延ばした手が境界を飛び越えて何かに触れたり、外の世界から思いがけないものが飛び込んできて私に触れたり。そんな瞬間に非日常を感じる、というような。

スライムで例えてしまうと、ぼわぼわとした日常をお気楽に生きているだけのように思えてしまうが、だからと言って、こんな私でさえ非日常との接触がなくなるわけではない。飛び込んでくるのがアゲハチョウユウなら良いけれど、劣化ウラン弾だったりすることもありうるわけで、そうしたら、私の世界はそのまま終わってしまうのだろうか。

好きなだけ眠り、考えることと言えば、食べ

物やカナヘビのことばかりという日常もあるし、食べるものもなく好きなことを言う自由さえない日常もある。そうかと思えば、ホワイイトハウスや首相官邸というところでは、自分たちは安全快適に暮らしながら、他人の生命や財産を気軽に蔑ろにできる日常もあるという。

世の中なんてそんなものさ、と言ってしまえば、確かにそうなのだろうけれど、そんなことを言っていると、気がついたときには、夜空を口ケツト弾が切り裂くことがあなたの日常になってしまうかもしれない。阿佐ヶ谷が焼け野原になり、空腹を抱えて、座り込んでいるだけの日常になってしまうことだってあるかもしれない。まあ、そんな中で、目の前を羽化したての瑞々しいアゲハチョウユウが通りすぎる光景に出逢えれば、素晴らしい非日常として感慨一人なのかもしれないけれど……。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki, architect

Voice : +81-3-3220-0644  
Facsimile : +81-3-3220-0640;  
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp  
篠崎健一アトリエ

編集後記  
からす新聞第五巻第四号(通巻第五号)無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇三年五月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾  
**ファミマ**  
中野区本町2-50-12 ドエル中野201号  
03-3379-1451  
宝仙寺  
ファミマ  
おうめかいどう  
中野板上駅